下駄スケート 皇太子に献上

大正8年、成立伝える文書から判明

下諏訪町発祥の下駄スケートが1919（大正8）年に皇太子（のちの昭和天皇）に献上されていたことが9日までに分かった。上諏訪町桑原町（現諏訪市諏訪）で当時、金物雑貨店を営んでいた小林傳三郎さんが献上した。子孫の故小林政信さん（享年82）、節子さん(77)夫婦が献上の成立を伝える額入りの文書を保管していた。下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館の元学芸員、河原喜重子さん＝同市＝によると、下駄スケートの献上が明らかになったのは初めてという。（野村知秀）

自宅で大切に飾られていた「皇太子への献上」を示す文書を手にする小林さん㊧と調べる河原さん

額入りの文書は小林さん宅の玄関の梁に飾られていた。大正8年7月5日付けで濱尾新・東宮大夫から赤星典太長野県知事宛てに出されており、上諏訪町在住の小林傳三郎さんが皇太子に献上することを願い出ていた下駄スケート2組について「伝献」（進献の意味か）が成立した旨が記されている。印はない。

節子さんの了承を得て額の裏を開けてみると、同年8月25日付けで諏訪郡役所から小林さんに宛てられた印付きの公文書が見つかった。皇太子が長野県を行啓（皇太子が外出なさること）した際に小林さんの献上品に対する挨拶状が東宮職から届いた旨の内容が書かれていた。節子さんは50年以上前に嫁いで以降、額の背面を開けたことがなく、公文書の存在は知らなかった。政信さんが言及したこともなかったという。

小林さん（諏訪）が保管

傳三郎さんが営んでいた商店は下駄スケートを売っていたが、作ってはいなかったという。献上品の製造者がだれで、いつ作られ、いつ献上を願い出て、行啓がいつだったのかは小林家の文書からははっきりしない。ただ、同市小和田の八剱神社が所蔵する毎年の諏訪湖の御神渡り（御渡り）と1年間の出来事が記された「湖上御渡注進録」によると、皇太子は大正8年7月4日に列車で長野市に向かう途中、下諏訪駅で下車し、下社明神（諏訪大社下社）を参拝して長野市に向かわれたことが記されている。

節子さんによると、政信さんは晩年、文書を博物館に寄贈することを望んでいた。ただ、額が飾られている場所が梁の高いところにあったためついに外すことができず、政信さんの希望はかなわなかった。政信さんが昨年11月に亡くなった後、節子さんが菩提寺の法光寺（同市）の小口秀孝住職と額について話す機会があった。小口住職は諏訪地方の歴史・文化を発掘、発信する住民グループ「諏訪塾」の会長を務めており、メンバーの河原さんに相談した。

公文書の発見で節子さんは「夫が生きている間に見せてあげたかったな」を目を潤ませながら「再び日の目を見ることになって良かった。夫も喜んでくれていると思う」とほほ笑んだ。河原さんは「諏訪の地で下駄スケートを作った先人の新たな功績であり、また、諏訪地方の繁栄ぶりを感じさせる」と語った。